

第12回

DMZ国際ドキュメンタリー映画祭
グローバルビジョン招待作品

JFF Plus 2021

世界の映画人が選ぶ
2021を象徴する日本映画

門真国際映画祭2021
ドキュメンタリー部門
最優秀作品賞

第35回 高崎映画祭
招待作品

DIASPORA FILM FEESTIVAL
Diaspora in Focus部門

スミカ

中華街

偶然の必然とも言える出会い
横浜中華街に僕は導かれた

林隆太監督作品

プロデューサー・撮影・編集：直井佑樹 録音：公文辰也

2020年 | 日本 | 98分 | ドキュメンタリー | 配給 記録映画「華僑」製作委員会

二つに分かれた枝をたどって
「華」の根に還る旅路がもたらす光は、
過去を照らすだけでなく未来への道標でもある。

— 温又柔 (作家)

国家という「大きな主語」から零れ落ちがちな、
一人ひとりの生きた声が、この映画から聞こえてくる。

— 安田菜津紀 (フォトジャーナリスト)

家族の、街の、国の、世界の歴史。それぞれが立ち上がり、絡み合った結果、
僕らがただここに在るという事の奇跡を感じさせる作品だ。

— ダースレイダー (ラッパー)

「凡人」の我々を魅する物語の力。

ついに日本映画界もピューリッツァーに相応しい会心の一作を手に入れた。

— 洪相鉉 (全州国際映画祭プログラミングアドバイザー)

毛沢東を「親父のようなもん」と言う父。
なぜ日本で暮らす中国人同士で対立するのか、
僕は理解できなかった。

中国と台湾『二つの中国』でゆれた横浜中華街

横浜中華街には日本で最大規模の中国人コミュニティがある。その歴史は約160年前にまで遡り、彼らは団結することで中華街を発展させ、日本社会で独自の地位を築いた。しかし、その道りは平坦なものではなかった。1952年、横浜中華学校で毛沢東を支持する教育が行われているとして、教師が学校から追放されるという事件が起きた。この「学校事件」の結果、横浜中華街は大陸系と台湾系に学校と華僑総会が分裂。長きに渡り対立が続いた。日中台の政治に翻弄されてきた華僑の苦難と葛藤の歴史。そして、共生の時代を歩む現在。映画は横浜中華街の観光地ではない知られざる一面を映していく。



中国語を話せない華僑四世がルーツを巡る物語

華僑四世の監督・林隆太(37)は、十五才の時に父・学文が中国人だと初めて知った。しかし、中国嫌いだった隆太は、家族の中の「中国」を避けるように生きてきた。それから十年以上経ったある日、一枚の写真と出会う。「台湾解放」というスローガンを声にし、横浜中華街を練り歩く紅衛兵の写真。そこには、若かりし日の学文の姿があった。日本人として育った隆太は、なぜ同じ日本で暮らす中国人同士で対立するのか理解できなかった。「台湾は中国の一部。毛沢東は親父のようなもん」と言う学文。中国籍のまま晩年を迎え、認知症になった祖母・愛玉。ずっと避けて来た家族の過去に触れたことをきっかけに、隆太は家族が過ごした横浜中華街と向き合う決心をする。中国・華僑のことを何も知らない華僑四世の隆太は、家族や父の友人・知人に会いながら、時代に翻弄された華僑の人生と複雑な想いに気づいていく。



<https://hananosumika.com>

[@sumika_yokohama](https://twitter.com/sumika_yokohama)

[@sumika.yokohama](https://www.facebook.com/sumika.yokohama)